

昭和43年度土木学会誌登載懸賞論文の審査を終わって

土木学会誌編集委員会委員長 森

茂

はじめに

土木学会が創立されて半世紀。初代会長古市先生が、本会の会員は将校なり兵卒にあらず即指揮者なり……本会の研究は土木を中心として八方に発展するを要す……」と方針を打出されてから、土木学会は常に土木技術者・研究者・教育者・学生を中心組織としての役目を果たしてきた。しかし、50余年の間には、学会の外部をとりまく環境は大きく変わり、それにともなって、学会の内容、規模、性格、活動状況等も創立当時に比べれば、著しく変ってきた。学会の組織・機能・活動方針等についてもこの際徹底的に検討し、新しい時代の土木界に適合するように、改善をして行かなければならぬという声も聞かれる。昭和44年の新年を迎えるにあたり、「土木学会のあるべき姿」を会員一同で一度じっくりと考えていただき建設的な批判、提案をしていただくという趣旨で、今回の懸賞論文のテーマがきめられた。なお本年度から一般・学生の二部に分けることを廃止して、一般も学生も同じテーマについて応募していただくことにした。

会誌編集委員会で、指名された審査委員（森 茂、榎木 亨、富田 勇、服部昌太郎、横山義雄）は、例年どおり著者名を切り取り、番号で区分した各論文を通読し、その構成、文章力、独自性、建設的な展開の有無等について検討したうえで、各委員が独自の判断で採点し、その結果を比較しながら互いに討論、調整を行ない、最終結論に達した。経歴、立場の異なる審査委員の構成ではあったが出た結果は非常に似ており、それだけにこの選考はかなり客観性を持つものと確信した。二席の2名の論文については、各委員ともはっきり他の作品に対する優越性を認め、しかもこの二者間にはほとんど差のない点を付けていた。したがってこの中でどちらが優れているかまたどちらかが一席に値するかという点に論議が集中したが両者一長一短あり、優劣はつけ難いこと、また両者ともややふみ込み不足の点が見られること等を考慮したうえで一席は見送り、二席2名として会誌に登載することにした。三席の2名はほとんど問題なく決定したが、佳作に該当する論文は残念ながら見あたらず、これまた見送りとなった。

入賞者名簿<順不同>

一席	なし	
二席	高野不二夫君	明星大学助教授 理工学部土木工学科
同	天津 公宏君	神戸市立工業高等専門学校助教授 土木工学科
三席	真田 喜充君	東京都交通局高速電車建設本部計画部計画第2課
同	近藤 徹君	建設省関東地方建設局企画室
佳作	なし	

内容に対する意見

(1) 二席 高野不二夫君

学会の歴史、学協会の実態より説き起こし、応募論文中最も着実な調査と、それにもとづく論理の展開が読みとられる。特に学問・技術の細分化・専門化という時代のすう勢に対処するため、学会は諸協会および他学会との関連性ある点を見出し、国土総合開発、近隣諸国との技術開発等を企画せよという論旨は共感を呼んだ。しかし全体にもう一步ふみ出したところが望まれる、というのが、この入賞者に対する要望である。

(2) 二席 天津 公宏君

論調がエネルギーでのおもしろい論文である。文の構成も良く、会長制度、学会財政問題の改革を取り上げるなど具体性に富み、迫力があつた。特に専門的な小学会を土木学会の下部機構として積極的につくれという意見は、好提案といえよう。ただ引用がやや長過ぎ、表現に生硬な点が散見されるのが惜まれる。

(3) 三席 真田 喜充君

土木界末端のレベルアップの先頭に学会が立つべきであるという主旨は魅力がある。しかし、後半が著者の論点である国土計画論に終止し、やや主題からそれて説得力が乏しい。

(4) 三席 近藤 徹君

こじんまりとまとまり文章力もあって読み易い論文であ

る。しかし主張が常識的で建設的な面が不足している。

おわりに

審査を終って委員一同に一種の不安感が訪れた。それは寄せられた論文の内容によるものではなく、その余りにも少ない応募編数によるものである。もちろんテーマの選択にも問題があったかも知れないし、学会について論じていただくには、学会が会員に提供するデータが不足であったという責任もあろう。毎年大学・官庁関係の

応募は多いが、現場からの応募が少ないという裏には、現場の人が書き易い課題を設定するよう心がけなければならない。

しかしいずれにせよ、26 000 余名が属する土木学会のあるべき姿に対する意見が例年の応募者よりはるかに少ないわずか8名からしか寄せられなかったこと自体、学会と会員の結びつきの現状を反映するものではなからうか。ここにわれわれは入賞した論文に述べられた数々の建設的意見をもとに、われわれの学会について真剣に考えるときがきたように思う。

二席入賞者の横顔

たかのふじお 高野不二夫君



大正12年11月13日、文京区森川町(東大前)に生る。開成中学卒業後、浦和高等学校へ進むが中退、昭和23年に早大付属高工電気科を卒業、27年に理工学部土木工学科をおえ建設省土木研究所へ入所、昭和40年まで物理、構造、コンクリート各研究室に勤務、その間4年ほど東京都立大助手をつとむ。40年に主任研究員として土研を退き日本建設コンサルタンツへ移り橋梁部課長となる。42年明星大学へ招かれ講師、助教授として現在に至る。なお、日本建設コンサルタンツ嘱託ほか、一、二の会社に関係し、調査・計画に参画している。現住所：練馬区旭ヶ丘2-19。昭和荘

「応募件数が少なかったと聞きましたので、多分まぐれあたりでしょう」と、控え目に語る高野さんは、最近でこそ土木図書館を時おり利用する程度だそうだが、昔はコンクリート委員会の仕事を手伝ったことがあるというから、学会への関心はかなり深かったといえようし、関連する他の学協会についての動勢にもかなりくわしい。

土研時代は物理、構造、コンクリートなどの研究室を歩き、舗装コンクリートやRC道路橋の計算例などの論文を発表し、電気養生、AEコンクリート、橋梁の経済設計などをテーマに研究を続け、土研をやめてからコンサルタントに入り、本四下部工、浜名湖橋下部工の予備設計や老朽橋梁の調査に従事したが、忙しすぎて本を読む暇もない生活に自信をなくし明星大学へ移られたという。来年ようやく第2回目の卒業生を送りだすが、学生の就職も順調に片づき、流行の学生運動も現在まったく関係ないということで、ほっと一息といったところらしい。

周囲の人とよく融和し迷惑をかけないこと、時間を有効に利用すること、を生活信条とし、後輩への提言として「新しい技術の発展応用とともに基礎的な問題をよく掘り下げることが大切です」というあたり、地道に根気よく積上げてゆくタイプの研究者らしい言葉である。

旅行、俳句など自然を眺める目を養ない、気分転換には推理小説を読むのが何よりも楽しみだそうだ。

御家庭は奥様にお嬢さん2人の4人ぐらしである。

あまつきみひろ 天津公宏君



昭和3年7月8日、兵庫県明石市に生る。県立明石中学から神戸工業専門学校土木科へ進み25年に卒業、28年には関西大学法学部を卒業した。神戸市立太田中学校教諭より県立神戸工業高等学校へ転じ30年土木科長となる。37年市立六甲工業高等学校に転じ38年同校の高専昇格にともない講師となり、現在は神戸市立工業高等専門学校(六甲高専が改名)土木工学科助教授。現住所：神戸市長田区大橋町1-155。

学会誌が懸賞論文を会員から公募しはじめて今年で5年目になるが、天津さんはそのうち3回応募し、41年の土木技術者に何を望むか>では三席に入ったから今回の入賞は、まさに粘りのたまものといえよう。

現在の神戸市立高専は、全国の高専の中では設備、研究費(年間48 000円)とも、非常に悪い条件のもとにあるようだ。「ゆっくりに考えて研究する時間、場所、費用もほとんどなく、専門の場ではとも他の大学や高専と太刀打ちできませんので、懸賞論文のようなテーマによる競争しか自分たちの存在を認識してもらうチャンスはありませんので……」と語りながら「自分の意見をたとえ一部であっても一つの主張として認めていただいたことが何よりも嬉しい……」と入賞の喜びをかみしめる。

若い頃はダンス、カメラなどにこり、野球、サッカーに汗を流したこともあった由だが、最近はおっぱら小説を読んだりテレビのボクシングを楽しむゴロ寝派に転向したという。今回の賞金は来年でかける韓国の船旅の一部に使うというが、41年の台湾旅行で得た「祖国の有難さを再認識すること」ができた人生経験から次の目的地を選んだものようだ。

「失敗を恐れるな」という生活信条をもち、学校の環境改善への苦勞から、伸びるべき若い芽がしぼんでしまうのではないかと、思い悩む誠実な教育者である。

小学校の先生をされている夫人との間に二男、二女のお子様をもつ暖い御家庭がある。